

# 自由と個性の転倒が生み出す虚構社会

## ーマルクスの疎外概念からの考察ー

加藤 奨啓

本論文では、個性化や多様性が強まるほど、不自由な社会が形成される逆説的な構造を、マルクスの〈疎外〉の概念が多様性社会・承認欲求社会・消費社会に拡張しているとして現代資本主義社会の疎外構造を分析した。資本主義社会の疎外として、自由を獲得した人間が、その自由の責任と孤独に耐えられず、外部の価値に自分自身を明け渡すことで生じる現象と捉えた。また、〈疎外〉を分析するにあたって、文化や価値観を構成する上部構造ではなく、社会の土台となる経済的な仕組みである下部構造、とりわけ〈生産力の増大〉が根本的な要因であるという前提をおき現代資本主義社会の疎外を分析した。第2章から第4章では具体的な疎外の事例を3つ挙げた。多様性社会では、カテゴライズが進んだことにより、〈平等〉から〈個性の可視化〉に本質が変質し、暗黙のルールが形成される同調圧力的文化が構築され、承認を求める社会が拡大している現状を明らかにした。承認欲求社会では、SNSによって、他者の生活を可視化できるようになったことで比較が生じ、人間の生物的欲求が利用されることで承認欲求を喚起し、結果としてスマホ依存症が生じる構造を明らかにした。消費社会では、モノから意味を消費する社会へと変化したことで、供給側が広告を通じてモデルを提示することで、消費者に個性や承認を喚起させ、消費者を意味の消費という終わりなきサイクルに誘う構造を明らかにした。この3つの事例から、多様性という本質が個性の可視化という方向で個性化が進み、人々は承認を求めるようになった。その承認は、SNSを介して人間の生物的欲求が利用され、承認欲求が増幅される。その結果、意味の消費という終わりなきサイクルに自ら参入することにより、〈自ら自由を放棄し社会やモノに依存〉という疎外が生じる構造を明らかにした。第5章では、3つの事例から考察した疎外構造をFromm (1941=1965) の「自由からの逃走」と「市場的性格」から分析した。「自由からの逃走」とは、自由と引き換えに責任が生じ、その結果、人々が孤独や不安から逃れるために自由を放棄し、〈権威〉に従属する構造を指す。加えて、資本主義社会では、市場に求められる〈自己〉が求められる「市場的性格」が「自由からの逃走」に影響を及ぼし、常識や世論といった形のない権威に従属する「自動機械化」の逃走形態へと導く。「自動機械化」の逃走形態は、「市場的性格」に基づき、〈他者から認められる自己〉を演じさせるため、自ら権威に従属しているという実感を与えない。その結果、〈生産力の増大〉を目的とした下部構造が用意した〈自己〉が「市場的性格」を助長することで、「自動機械化」として自由から逃走する構造である。したがって、現代資本主義社会の疎外は、〈他者から認められる自己〉という市場性格を利用し、人々を「自動機械化」として権威に従属させることで、自覚なくして、自ら自由を放棄させ、〈生産力の増大〉に従事させる構造である。